

エディプス・コンプレックスの発展

A Contemporary Perspective of Oedipus Complex

富田 悠生
Yuki TOMITA

Key words: エディプス・コンプレックス Oedipus Complex, 早期エディプス・コンプレックス
Early stages of Oedipus Complex, エディプスの錯覚 Oedipal illusions.

I はじめに

エディプス・コンプレックスとは、ギリシア神話のエディプス王の物語に基づいて命名された精神分析の基本的概念の1つである。小此木（2002）によれば、エディプス・コンプレックスには、同性の親にとって代わり亡きものにしたいという願望と、異性の親と結合したいという願望、これらの願望をめぐる同性の親からの処罰に対する恐怖ないしは罪悪感を構成要素とする心的な布置を陽性のエディプス・コンプレックス、その逆の同性の親に愛情を向け異性の親を憎む心的布置を陰性のエディプス・コンプレックスと呼び、両者は共存し、葛藤し合う（例えば、息子の父を凌ぎたい願望と、同性愛的に愛されたい願望の葛藤）、と述べている。

当初Freud,S.が提唱したエディプス・コンプレックスの概念は、後にKlein,M.によってその臨床的価値が拡大された。Hinshelwood,R.D. (1989) はKlein,M.によるエディプス・コンプレックスの拡張を以下のように説明している。Klein,M.は本能的な衝動のなかにある幻想内容を強調することで、エディプス期の諸々の幻想、とりわけ前性器的構成物（口唇期と肛門期の）を明らかにした。Klein,M.はそれをエディプス・コンプレックスの早期的・前性器的な起源の証拠として理解した。Klein,M.にとって、エディプス・コンプレックスの時期は、Klein,M.自身の臨床観察と必ずしも一致していなかったために、超自我がエディプス・コンプレックスの後継者だとするFreud,S.の理論に常々不安を感じていた。最終的にKlein,M.はFreud,S.に対して反論を唱えなければならなかった。子どもの最初期のとても恐ろしい精神病的な幻想世界は、古典的なエディプス・コンプレックスに隠れて埋没しているが、Klein,M.はエディプス・コンプレックスの早期段階を強調した。Klein,M.は早期段階に潜むその強烈さを明示することで、エディプス・コンプレックスの重要性を鮮明にしたと考えていた。さらにKlein,M.は、陰性（逆）エディプス・コンプレックスの重要性、及び陽性・陰性コンプレックス間での複雑な相互作用の重要性に力点を置き、後にこれは抑うつポジションで

の両価性の理論に吸収されることになった。これに引き続いて、両価性と抑うつポジションに関するKlein,M.自身が展開した理論は、「良い」像と「悪い」像の幻想を和解させることで、エディプス・コンプレックスの絶対的な定式に帰結した。このことは、精神分析の転移状況のなかで、分析家の心の一部と一緒にするという患者の関係を含んでいる。

その後、Britton,Rは、子どもが親の性的関係を認識することと現実と直面できる能力との関係について探求している。Britton,Rは、子どもをエディプスの三角形の一つの角として想定し、2人の親との結合をそれぞれ、三角形の二辺を形成するものとして描写している。ここで重要な一辺は、父親と母親との結合による一辺である。この両親間の結合を認識するとき、子どもは自分を締め出す両親の関係を見出しているのである。その結果は、“親を繋ぐ結合の認識によるエディプスの三角形の囲い込み (Boswell,J., 2001)”である。象徴的にこれは、現実に適応する能力の土台となる心的構造を作り出す。ここでいう現実と直面できる能力とは、両親を万能的に支配することの放棄を含意する。それは抑うつポジションに到達しワークスルーする際に必須の要素である。Britton,Rは、エディプス・コンプレックスの認識と抑うつポジションの確立がどのように進展していくのかについて、考察している。さらに、Britton,Rは、エディプス三角形への到達が困難であるとき、エディプス錯覚という事態を引き起こされると述べている。本稿では、エディプス・コンプレックスが精神分析の歴史のなかでどのように発展し、また現在ではどのような理解に至っているのかについて検討することを目的としたい。

II Freud,S.によるエディプス・コンプレックス

Laplanche,J.・Pontalis,J. (1967) は、Freud,S.のエディプス・コンプレックスについて以下のよう

に記している。

子どもが両親に対して抱く愛および憎悪の欲望の組織的総体をいう。その陽性の形ではコンプレックスは「エディプス王」の物語と同じ形で現れる。すなわち、同性の親である競争者を殺そうとする欲望と異性の親への性的欲望とである。その陰性の形では逆になり、同性の親への愛と異性の親への嫉妬と憎しみとなる。実際には、エディプス・コンプレックスの「完成した」形では、この2つの形態は様々な程度で併存するものである。

フロイトによれば、エディプス・コンプレックスは3歳から5歳の間に頂点に達する男根期に体験される。その凋落は潜伏期への移行を示す。それは思春期に再び復活し、一定のタイプの対象選択により、程度の差はあっても克服される。

エディプス・コンプレックスは人格の構成と人間の欲望の方向づけに基本的な役割を演じる。

精神分析家はこれを精神病理学の重大な関係軸とし、全ての病理学的型態について、その位置とその解決の様相を決定しようとする。

精神分析的人間学はエディプス・コンプレックスの三角形的構造を明らかにしようと努める。そし

てこのコンプレックスは、単に両親と子どもによる家庭が主流となっている文化だけでなく、あらゆる文化においても普遍的に認められるものであると考えられている。

次に、Freud,S.がエディプス・コンプレックス概念を着想したギリシア戯曲『オイディプス王』物語（川島，1996）を引用したい。

オイディプス王の両親であるテバイの王ライオスとその妻イカオステは、「みずからの子どもが父親を殺し、母親を妻とするであろう」というアポロンの神託を恐れ、幼いオイディプスを殺すよう家来に命ずる。しかし、不憫に思った家来は、森で遠国コリントスの家来にオイディプスを引き渡す。その後、オイディプスは、子どもなかったコリントス王の王子として成長する。やがてオイディプスもアポロンの神託を知り、信託が実現することを恐れ、実の両親と信じるコリントスの王と王妃の元を去り、放浪の旅に出る。しかし旅先で、実の父親とは知らずにライオスと言い争いになり、殺してしまう。その後、テバイの人々を苦しめる怪物スフィンクスの謎を解き、テバイの国を救い、英雄として迎えらる。そして、その国の王妃で未亡人となっていたイカオステを実の母親とは知らずに迎えることになる。やがて、テバイの国に様々な災難が降りかかるようになる。その原因は、前王ライオスを殺した犯人が不明であることが大きく関わっていることが分かり、オイディプス自ら犯人捜しを進めていく。しかし、その過程で自身の出生の秘密が次々と明らかになり、オイディプスの実の両親はライオスとイカオステであるという真実に突き当たる。絶望のあまり、イカオステは自殺し、オイディプスは自らの目を突き刺し、盲目となる。

Freud,S.は、1897年10月15日のフリースへの手紙のなかで、「エディプス王の物語が何故人のこころを捉えるのかが分かった。…このギリシア神話は誰でもが自分自身のなかにその存在の痕跡を認めうる強迫を明らかにしている」と記し、Freud,S.自身の自己分析によってエディプス・コンプレックスの存在を漠然としてではあるが認めつつあることを示している。そして、1905年の『性欲論三篇』のなかで「すべての人間にエディプス・コンプレックスを克服するという仕事が課せられている」として、エディプス・コンプレックスの普遍性を示唆している。そして、その後の『自我とエス』のなかでは「男の子は母親に両価的な態度をとり対象選択をするだけでなく、同時に女の子のように父親に女性的な優しい態度をとったり、母親に嫉妬的・敵対的態度をとることがある」と述べ、エディプス・コンプレックスの陽性と陰性が入れ替わる可能性について言及している。

エディプス葛藤が生じる時期として、Freud,S. (1916) は、小児期、つまり3歳から5歳頃を想定していた。Boswell,J. (2001) によれば、それはペニスが少年にも少女にも特別な意味を持つ時期であるという。つまり少年少女にとって、徐々に自分の性別がアイデンティティとして認識されるなかで、彼らは同性の親と異性の親を区別するようになるのである。Freud,S.は、男児にとって陽性エディプス・コンプレックスは、母親への性器的願望を含んでおり、それには父親を殺したくなる気持ちを生み出す父親への嫉妬が伴うと考えた。すると、父親は男児の性的欲望を禁じ、去勢を迫る恐ろしい人物となる。男児は、去勢の恐怖によって母親に対するリビドー的欲望を放棄するよ

うに強いられ、通常の発達過程では性的対象としての母親を放棄することとなる。性的欲望を禁止し、懲罰しようとする父親は取り入れられて、超自我の中核を形成する。それは、良心や倫理観、道德観などにも繋がる。最終的に形成される超自我は、Freud,S.にとってはエディプス・コンプレックスの解決、解消とみなされている。

Ⅲ Klein,M.のエディプス・コンプレックス

Hinshelwood,R.D. (1989) は、以下のようにKlein,M.の貢献を説明している。子どものPlayの研究によって、Klein,M.は子どもたちの多彩な幻想や様々なやり方で玩具のフィギュアと同一化するような表現方法に気が付いた。こうした多彩な同一化は、子どもとともに1つのフィギュア、さらにまた別のフィギュアの観点からPlayの出来事を見てみると、Playそのものの創造的な繁栄を作り出しているように思える。さらにKlein,M.はエディプス・コンプレックスの単純形態である、一方の親に憎しみを抱き他方の親に愛情を抱くことと同じように、それぞれの両親への同一化について説明している。

私は、ウェルナーが「もじもじ思考fidgeting thoughts」と呼んでいるものが何であるかを理解した。彼は、ターザンの動物たちのことを心配しているfidgeted aboutと私に話した。モンキーたちがジャングルのなかを歩いている。幻想のなかで、彼もモンキーたちの後ろを、彼らの歩行に合わせて歩いている。連想によって、彼は母親とカップルである父親への賞賛、そして彼も当事者としてこれに参加したいと願っていることを鮮明に示した。さらに、母親と父親とのこの同一化が、彼の他の多くの「もじもじ」思考の基礎を形成していた。(Klein,M.,1925)

こうした乳幼児の幻想を基盤として、Klein,M.は1919年から1935年までに、エディプス・コンプレックスについて4つの主要な臨床的発見をした。これらの発見のそれぞれの歩みはとても重要なものであり、最終的に抑うつポジションの理論となった。

- (1) エディプス・カップルの幻想に密着したサディズムの特殊な本質—これはとても大きな不安を引き起こす。
- (2) 前性器的幻想とそれに伴う前性器起源の臨床的証拠—これは3歳から5歳の性器期に生じるとされるエディプス・コンプレックスについてのFreud,S.の見解と全く異なっている。
- (3) 個々の器官、例えば臍にあるペニス（乳房にある乳首）のような意味でのエディプス的両親の認知—それは結合両親像を形成している永遠に結合した両親という恐ろしい幻想を引き起こす。
- (4) 陽性的と逆エディプス・コンプレックスの曖昧性—それは一緒に存在しているが、それぞれの両親の両面的感情を形成する。

Freud,S.は前性器期の衝動を単に排出されたものとし、一方、本来のエディプス幻想は性器期の

性器段階（3歳から5歳くらい）でのみ始まるものとした。しかし、Klein,M.は前性器期の年齢でのエディプス幻想について、「…子どもたちはしばしば、1歳の初め頃に、異性の親へのはっきりとした好みや初期エディプス傾向を他の指標で示す」ことを明らかにした。前性器期の衝動は、子どもたちの両親と両親の性的関係に対する反応のなかに見出され、子どものPlayは原光景に関連した様々な考え、幻想、不安に関する問題の解決を試みている。子どもはこれらの事実を知らないが、これらの幻想は子ども自身の欲求（口唇的と肛門的）と欲求不満の解釈を根拠にしている。前性器期でのまとまった臨床的な証拠によって、Klein,M.はエディプス・コンプレックスが性器期より以前に現れるという結論を示した。

子どもの幻想の大部分は、部分対象という用語で表される。いわば、子どもはそれぞれに関連する諸器官を想像している。それらはほとんど視覚化されず、単一機能のみを有する対象として想像されるが、性交内で一緒になる。器官の世界に巻き込まれることは、母親の創造的な身体に含まれる赤ん坊が存在し、それが再び攻撃的な他の幻想を賦活する。

エディプス・コンプレックスの早期段階の中核は、両親自身と乳幼児を破壊する暴力的な性交内に閉じ込められた恐ろしい結合したカップルとしての両親の姿である。従って、結合された両親は乳幼児にとって、何も残すことのない大惨事のなかで互いに破壊し合う。同時にその両親像は両親に対する乳幼児自身の万能的な空想のために、乳幼児自身に降りかかってくる。そして、その両親像は、両親がお互いに危害を加え合っていると乳幼児が考えるのと同じ破壊力に、乳幼児自身を晒すのである。

IV Britton,Rによって洗練されたエディプス・コンプレックス

Britton,R. (1998) は、Klein,M.がエディプス状況という用語を採用し、そこにFreud,S.が原光景として言及していたもの、すなわち知覚されたり想像された両親の性的関係を含めていることを強調し、エディプス状況の視座からエディプス・コンプレックスと抑うつポジションのワークスルーとの密接な関係を認めている。Britton,R.は、以下のように述べている。

親の性的関係の最初の認識は、母を唯一永久に所有するという考えを放棄することを含み、重大な喪失感に通じる。それは、耐えられなければ、迫害感になるかもしれない。後には、エディプスの遭遇は、親と子どもの間の関係とははっきり異なる親同士の関係との差異の認識をも意味する。つまり、親同士の関係は性器的であり、子どもを作るものであるのに対し、親 - 子ども関係はそうではない。この認識は喪失感と羨望を生み出し、もし耐えられなければ、不平や自己蔑視の感覚になるかもしれない。

Britton,R. (1989) は、子どもが親同士の関係から排除される苦痛を明確に描き出している。彼は以下のように続けている。「この苦痛が良い内的対象に支えられながらワークスルーされるとき、

子どもには参加者ではなく証人であるという第三の種類の対象関係のための原型が供給される。そのとき、対象関係を観察できる第三の位置a third positionが成立する。これによって我々は、自分たちが他者と交流するのを見たり、自分自身の見方を保持しつつ別の見方を抱いたりする能力、つまり我々自身でありながら自分について振り返る能力がもたらされる。これは、我々が分析において、我々自身及び患者に見出したいと望む能力である」Britton,R.の示す第三の位置は、主観的な考えが抑制されるという意味で様々な知見に拓かれて、思考に拡がりをもたらされるであろうし、結果的により創造的ともなるように思える。私たちは、クライアントが人生における事実、すなわち喪失と希望の両方を現す誕生について、そして子どもが両親の性的関係から締め出されて羨望と嫉妬を掻き立てられることについて、感情を表わして立ち向かおうとしている姿を見ることがある。自分が排除されることによる気づきと発見を得る。この変化と成長の過程には、苦痛が伴うが、しかしより暖かくて寛大な関係を形成する潜在的な力となる。クライアントにとっては、苦難に満ちた体験なのだが、この移行を達成できたときは、クライアントと治療者双方に、自由な関係を生きる可能性が高められるように思う。このときクライアントは、自分自身の人生の可能性を発展させる新しい道を発見するように見受けられる。

さらに彼は、両親の関係の心的現実性を否認するために、錯覚的なエディプス配置が防衛的組織として形成される、と述べ、抑うつポジションへのワークスルーが妨げられるという視座を提供している。そしてこれをギリシア戯曲において、この現象をオイディプスが母イカオステを妻とし、王座に就き、事実を知っているが見て見ぬふりをする、という悲劇的な一面であると加えている。Britton,R.は、Bion,W.のコンテイナー・コンテインドモデルを用いて、以下のように説明している。Bion,W.は、母親の包容containmentが失敗してしまうと、その結果、どのような対象とも有益な関係を学ぶことが妨げられ、破壊的な羨望に満ちた超自我が発達してしまうことを記述した。彼は、母親が子どもの投影を取り入れる能力がないことは、子どもによって、子どもの良い対象としての母親との結合とコミュニケーションに対する母親による破壊的な攻撃として経験されることを明らかにしている。良い母親対象という考えが回復されうるのは、母親への怖さを分裂排除して、敵対的な何かとして捉え、それが自分と良い母親との結合を攻撃していると感じるときである。母親の良い部分は不確かとなり、母親と父親との関係を認めることはさらなる脅威となる。この発見が刺激する憤怒と敵意は、良い対象が存在する世界に関する自分の信念を脅かす。自分と母親との良い結合を攻撃する敵対的な何かは、エディプス的な父親と同等視され、そして両親間の結合は、自分を非受容的で死人のような母親として再編成すると感じられる。エディプス状況を知ることともまた、心の破局の口火を切るように感じられてしまう。このような破壊的な心的現実を閉ざすように目論まれた防衛的な空想をBritton,R.はエディプス的錯覚Oedipal illusionと呼んだ。神話において、エディプス空想とは、エディプスが廷臣たちに囲まれて、自分の母親である妻イカオステと共に王座にいる状態であるという。そこでは廷臣たちは、すでに半分は知っていても無視することに決めた者たちであり、見てみないふりをしている。このように、錯覚が勢力をふるっている状況では、好奇心は惨事をもたらすものと感じられる。空想されたエディプス・コンプレックスの悲劇的なバージョンでは、エディプス三角の発見は、養育カップルや親カップルの死であると感じられる。

この錯覚においては、第三者の概念への到達は、二者関係を殺害する。エディプス錯覚の勢力が最大である場合、両親の関係は知られていても、その完全な意味は回避され、両親の関係と親子関係の違いを証明するその本質は認識されない。錯覚が、エディプス状況についての空想から個人を守ると感じられる。そのような事例では、親が勝ち誇る様子に屈辱的に晒されたり、両親の性交の悲劇的なバージョンが待ち受けていると感じられたりする。根底にある状況を回避するために、このような錯覚が永続している限り、エディプス・コンプレックスが競争や放棄といった正常な過程を通じて解決されることはない。転移性の錯覚は、クライアントが耐えられない転移状況だと思うものから守ってくれるように感じられる。その錯覚が続いている間は、クライアントは治療者のすべてのコミュニケーションを錯覚に文脈から解釈する。それが放棄されるとき、はじめてクライアントは転移のなかで迫害的な状況や苦痛な状況に晒されることになる。

V 結語

松本（2010）は、エディプス・コンプレックスをめぐる学術的背景について、以下のように述べている。「Klein派精神分析においては、ある時期まではエディプス・コンプレックスは目立った討論や研究のテーマではなかった。それは、Bion,W.がエディプスを取り上げた1960年代においてもそうだった。しかし、母子の二者関係に重点を置いたKlein,M.の新しい考え—すなわち妄想・分裂態勢や抑うつ態勢や投影同一化—についての検討が一段落した1980年代後半において、“エディプス・コンプレックス”は再び、特に抑うつ態勢や原光景との関連でKlein派精神分析的臨床家のあいだでもその臨床的な重要性が注目されてきたように思われる」なかでも、代表的な視座は、本稿でも取り上げたBrittton,R.による第三の位置概念であろう。

精神分析的臨床実践において、あたかも治療が進展しているように見える関係性のなかに、クライアントがエディプス状況を認識することへの痛みに耐えきれず、エディプス的な錯覚によって凌いでいるということがあり得る。治療関係に持ち込まれたエディプス錯覚は、治療者にとっても錯覚的で倒錯的ともなり得るため、エディプス錯覚の維持という共謀関係もそこに存在すると考えられる。治療者は、逆転移を通じて自身に生じている錯覚に気付くことができれば、それは転移/逆転移の文脈のなかで解釈され、脱錯覚を起こし、治療的に進展させることができるだろう。しかししばらくすると再度錯覚が形成され、また解釈によって脱錯覚を生じさせる必要に迫られる。このように、いわゆるワークスルーといわれる転移解釈の連続体を別の側面から説明したものが、エディプス錯覚/脱錯覚と考えることができるのではないだろうか。

謝辞：対象関係論Kleinian approachの理論、臨床実践について、日頃よりご助言、ご指導を賜っております青山学院大学教育人間科学部教授 平山栄治先生に厚く御礼申し上げます。

文献

- Boswell,J. 2001 Oedipus Complex. In:Bronstein,C. (ed.) Kleinian Theory:A Contemporary Perspective. Whurr Publishers. 福本修(訳) 2005 エディプス・コンプレックス. In:福本修・平井正三(監訳) 現代クライン派入門—基本概念の臨床的理解—. 岩崎学術出版社, 79-98.
- Britton,R. 1989 The missing link:Parental Sexuality in the Oedipus Complex. In:Shafer,R. (ed) 1997 The Contemporary Kleinians of London. International Universities Press. 福本修(訳) 2004 失われた結合:エディプス・コンプレックスにおける親のセクシュアリティ. In:福本修(訳) 現代クライン派の展開. 誠信書房, 169-185.
- Britton,R. 1998 BELIEF AND IMAGINATION.Explorations in psychoanalysis. London:Routledge. 松木邦裕(監訳) 古賀靖彦(訳) 2002 信念と想像:精神分析のこころの探求. 金剛出版.
- Freud,S. 1892-1899 Aus den Anfagen der Psychoanalyse. Marie Bonaparte, Anna Freud and Ernest Kris (ed) 1950 London;Imago Publishing Co. 河田晃(訳) 2001 フロイト フリースへの手紙1887 - 1904 誠信書房.
- Freud,S. 1905 Three Essays on the Theory of Sexuality. S.E.VII. 懸田克躬・吉村博次(訳) 性欲論三篇. フロイト著作集5 人文書院.
- Freud,S. 1916 Introductory Lectures on Psycho-Analysis. S.E.XV&XVI. 懸田克躬・高橋義孝(訳) 1971 精神分析入門(正・続). フロイト著作集1 人文書院.
- Freud,S. 1923 The Ego and The Es. S.E.XIX. 小此木啓吾(訳) 1970 自我とエス. フロイト著作集6 人文書院.
- Hinshelwood,R.D. 1989 A Dictionary of Kleinian Thought. Free Association Books. 衣笠隆幸(総監訳) 2014 クライン派用語事典. 誠心書房.
- Hinshelwood,R.D. 1994 Clinical Klein. The Cathy Miller Rights Agency,London. 福本修他(訳) 1999 クリニカル・クライン—クライン派の源泉から現代的展開まで. 誠心書房.
- 川島重成 1996 元版「オイディプス王」を読む. 講談社学術文庫.
- Klein,M. 1926 The Psychological Principles of Early Analysis. In:Writings of Melanie Klein,Vol.1. London:Hogarth Press. 長尾博(訳) 1983 早期分析の心理学的原則. メラニー・クライン著作集1. 誠信書房.
- Klein,M. 1928 Early stages of Oedipus conflict. In: Writings of Melanie Klein,Vol.1. London:Hogarth Press. 柴田謙二(訳) 1983 エディプス葛藤の早期段階. メラニー・クライン著作集1. 誠信書房.
- Klein,M. 1945 The Oedipus Complex in the light of early anxieties. In: Writings of Melanie Klein.Vol.1. London:Hogarth Press. 牛島定信(訳) 1983 早期不安に照らしてみたエディプス・コンプレックス. メラニー・クライン著作集3. 誠信書房.
- Laplanche,J.・Pontalis,J. 1967 Vocabulaire de la Psychanalyse. Presses Universitaires de France,Paris. 村上仁(監訳) 1977 精神分析用語辞典. みすず書房.
- 松木邦裕 2010 分析実践の進展—精神分析臨床論考集—. 創元社.
- 小此木啓吾 2002 エディプス・コンプレックス In:精神分析辞典 岩崎学術出版社.